

PDF issue: 2025-05-28

パロディとしての正義漢: 『坊っちやん』をめぐる 漱石とホトトギス派の写生文の抗争

福井, 慎二

(Citation)

國文論叢, 42:1-12

(Issue Date)

2010-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81011632

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011632



パロディとしての正義漢

『坊っちやん』をめぐる漱石とホトトギス派の写生文の抗争

福 井 慎 二

坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは正義漢のパロディであり、その滑稽味のが、むしろ坊っちゃんは正義漢のパロディであり、その滑稽味のから、〈俳句趣味〉を絶対化するホトトギス派の独善的な写生というのも漱石が、〈趣味〉の再認識という『文学論』の問題意というの考え方を相対化するからだけでない。漱石の写生文の方法は本トトギス派と異なるにもかかわらず、ホトトギス派の独善的な写生まがいちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる坊っちゃんは従来「直情径行で単純で正義派である」とされる方に

ホトトギス派の写生文の各方法の交渉という新しい観点からの漱だった『坊っちやん』の写生文としての位置づけ、さらに漱石とで、『坊っちやん』(明治39年4月)のホトトギス的方法の漱石とで、『坊っちやん』(明治39年4月)のホトトギス的方法の漱石とで、『坊っちやん』(明治39年4月)のホトトギス的方法の漱石とで、『坊っちやん』(明治39年4月)のホトトギス的方法の漱石を主文の『吾輩は猫である』(明治38年1月~39年8月以下写生文の『吾輩は猫である』(明治38年1月~39年8月以下

佳境に入るたびに急に魚が釣れて話が中断する間の悪さの滑稽味

よう。坂本四方太『鮒釣』(『ホトトギス』3巻2号明治32年11月

以下雑誌名省略)では魚が釣れずにいたが、村人との世間話が

石文学の形成過程の一端が明らかとなるはずだ。

一、パロディとしての正義漢

『坊っちやん』のホトトギス的方法の意味づけは次節で行ない

大ずホトトギス派の写生文の滑稽味を具体的にいくつか確かめてみて確認し、正義漢のパロディぶりを見てみる。ホトトギス派の写生文との相違が明らかとなる。ホトトギス派の「写生文は巻様だが、滑稽味を生むメカニズムに注目すると漱石の写生文との相違が明らかとなる。ホトトギス派の「写生文は幾変遷生文との相違が明らかとなる。ホトトギス派の「写生文は幾変遷生文との相違が明らかとなる。ホトトギス派の写生といた描写ゆえに素材自体の持つ滑稽味に基づき、滑稽な素材を〈写上でする物語内容のシステムとなる。 ホトトギス派の写生文の滑稽味に基づき、滑稽な素材を〈写生〉する物語内容のシステムとなる。

— 1 ·

がある。これは設定自体の滑稽味である。

楽天生『募集一日記事(二月十一日)』(4巻6号明治3年3

月)では、花火大会当日出場準備で多忙な「予」の家に隣村の新

- バコ・&パ CA、 Wind Table Table Throm が、A、 A を 新吾は久し振りゆへ膳の上にて共に一杯酌んで昼飯もすんだ吾が訪ねて来て支障をきたす。

て、手拭をかむせてあつた、見れは長座の人を掃ふまじない同ドツト笑ふ声が聞へた、何かと思ふて見れは箒が一本立れば好いと云ふ様子である、新吾が帰るや否や次の間にて一が中々談が永い、来て居る連中は待遠てたまらない、早く帰

稽味がある。さらに会場の山村に行く途中、松の生えた絶壁で騒長居の人を帰らせる咒をいたずら半分に試すと意外にも効いた滑

だソーデ、案外早く功を奏したと云ふ

便をしたならは 如何にも好い気持だらうと云ふと、貴様ら政と云ふ若者と、寅と云ふ若者とが、あの松の上に登つて小動が起きる。

と、繁といふへツツイ頭の親爺がまぜかへせし為め論も小便大争論が始まろうとした、然らば二人にて登つてたれて見よにそれが出来るか、イヤ出来まいとて、出来る出来ないの、

と叙述している。 ナンセンスな度胸試し・意地の張り合いの滑稽味があるが、淡々

になつてしまつた

入て居る籠は一つもないが是は二十五羽入りと定めて居るのだか鶏二十羽を「自分」が請求すると、副官は鶏が逃げて「十羽以上遼一『兵站部』(8巻3号明治37年12月)では、兵站司令部に

ら其中から五羽丈けを差引いて渡さねばならぬ事になる、

御覧の

ンスなお役所仕事の滑稽味がある。て行かねばならぬ事になる」と言う。タテマエに囚われたナンセ

こうでは役房仕事の治利時がある

これらの具体例は、

滑稽な内容なのに読者を釣り込まない

淡

通り三

羽入り五羽入りの中から五羽を引けばゼロだ、

只籠計り持

を滑稽に思う様子もなく淡々と聞く。このようにホトトギス派の務を果たすことで精一杯の「自分」は、副官のナンセンスな理屈のいたずらをまるで他人事のように扱っている。『兵站部』の任の出場者なので新吾の長居に迷惑なはずなのに、仲間の咒とした観察報告のような書き振りが目立つ。『募集一日記事』のとした観察報告のような書き振りが目立つ。『募集一日記事』の

(丘一頁)を寺つ「乍番の心的犬熊」(四九頁)こ写主文の特徴がつつも「傍から見て気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情」全集16巻五〇頁)に喩えられるように、対象に〈距離〉を保ち

写生文は、滑稽な内容を淡々と書くことに特徴がある。

一方漱石は、「大人が小供を視るの態度」(『写生文』明

治

40

離〉を取るからこそ滑稽に語れるのであり、極端な場合悲惨な事稽味のない内容を滑稽に語る調子に表われる。物語内容に〈距あると指摘する。漱石の写生文の場合「作者の心的状態」は、滑(五一頁)を持つ「作者の心的状態」(四九頁)に写生文の特徴が

つ目は滑稽味のない内容の処理に限定して捉える妥当性だ。といこのように漱石的方法を考えるに当って問題点が二つある。一い回しで滑稽化し、如何に語るかという物語言説のシステムだ。柄でも滑稽に語れる。漱石的方法は素材自体滑稽ではないのに言

に限定出来なくなるはずだからだ。しかしホトトギス的方法と対目に語ることで一層滑稽となる場合も該当し、滑稽味のない内容うのも漱石的方法を滑稽化する語りとすれば、滑稽な内容を真面

比しつつ、語る内容と語り方を相関させて本稿では漱石的方法を

稽化する方法として捉えることで対比されることになる。 捉えている。したがってホトトギス的方法が滑稽な素材・内容を する以上、漱石的方法を滑稽味のない内容に限定して滑 出来ず、 ンフルエンザで死んだ妻の幽霊が夫に逢う話を聞かされ、

対比的に捉えるならば、漱石の写生文にホトトギス的方法が用

ん』(4巻5号明治34年2月)では、床屋の清どんがカミソリの いられるのは矛盾に見える。例えば駄洒落だ。寒川鼠骨 『清ど

刃を欠いて弱っていると、客が歯医者を紹介し「口中一切ツて言 ふから歯ならあすこだ」(傍点引用者、以下同じ)とからかう。

うのも漱石は〈俳句趣味〉を絶対化するホトトギス派の考え方を 句趣味〉に基づくホトトギス的方法を用いても矛盾しない。とい 『猫』にもトチメンボーのような駄洒落がある。 実のところ (俳

漱石の写生文が〈俳句趣味〉を共有しても奇妙ではないからだ。 批判こそすれ、 〈俳句趣味〉 自体を否定しているわけではなく、

を漱石的方法で処理する場合、あるいはたとえホトトギス的方法 方法を用いても単なる滑稽な設定に止まり、漱石文学のモチーフ 表われたのが漱石の写生文だと言える。また漱石がホトトギス的 〈俳句趣味〉を共有しても、 漱石の持ち味が独特の方法となって

が異なる場合は、漱石独特の写生文となるから矛盾しない。 で漱石文学のモチーフを処理してもホトトギス派の写生文と構造 さて漱石的方法を考える上での二つ目の問題点は、写生文の

恋人がインフルエンザに罹ったことを「余」が友人に話すと、 ない独特さがある。 態」を表わすと見なされる。 の語りに基づくことが多く、一人称の語り手が「作者の心的状 「作者の心的状態」での作者と語り手の関係だ。 例えば 『琴のそら音』(明治38年5月) しかし漱石の場合必ずしもそうなら 写生文は一人称 は、

> お手伝いの婆さんの迷信深さに脅かされて不安な「余」は一 翌朝恋人を訪ねると全快していたという内容だ。

さらに

人の身を気遣うというそれ自体滑稽でない内容を真剣に「余」が いないので漱石の写生文の語り手と言えない。にもかかわらず恋 の想いに 〈距離〉を取って自己相対化して「余」は滑稽に語って 恋人へ

語る程、傍から見て微笑ましく思われるのは、作者が「余」を相

対化しているからだ。その点からすれば『琴のそら音』の語り手

場合は漱石的方法となる。このように語る内容が語り手にとって でない内容を真面目に語っても作者の相対化によって滑稽になる 「余」は「作者の心的状態」を表わしていないことになる。

切実か否かで、写生文の滑稽味の生まれ方が左右される。 以上のことを踏まえると坊っちゃんは怒ったり真面目に語って

3

程滑稽味を生じたことから、『坊っちやん』が漱石的方法に基づ 『琴のそら音』も漱石の写生文の語り手ではないのに真剣に語る いるので、漱石の写生文の方法に基づかないと言える。ここで

設定や非常識な考えのような素材自体の滑稽味に由来し、それが ホトトギス的方法なのである。 の滑稽味は作者の相対化に基づくのではなく、坊っちゃん自身の かないとは言えないという見方もあろう。しかし『坊っちやん』

ちゃんに声を掛ける場面だ。 『坊っちやん』のホトトギス的方法を具体的にいくつか見てみ 次の引用Aは、バッタ事件の事情説明を聞いて校長が坊っ

よう。

おれに向つて、あなたも嘸御心配で御疲れでせう、 授業に及ばんと云うから、 おれはかう答へた。「いへ、 今日は ち

ィ

Α

る間は心配にやなりません。(中略)」校長は(中略)然し顔とも心配ぢやありません。こんな事が毎晩あつても、命のあ 命、 の、 あ

慥かにきけますから、授業には差し支ませんと答へた。校長 が大分はれて居ますよと注意した。(中略)蚊が余っ程刺し たに相違ない。おれは(中略)顔はいくら膨れたつて、 口は

В

張り方は滑稽であり、 傍点部の「命のある間は心配にやなりません」と誇張した意地の 以下同じ は笑ひながら、 大分元気ですねと賞めた。(四 強がって負けず嫌いの人柄を表わす。 波線引用者 蚊に

る でも可笑しいと思つたが苦情を云ふ訳もないから大人しく卒業し 非常識な考えや奇妙な理屈の滑稽味もある。物理学校を「自分

語り口ではなく設定自体の滑稽味があり、それで校長は笑ってい 刺されて腫れて変な顔になって授業すること自体既に滑稽であり、

マエを理解出来ないばかりか辞職しようとする行動自体滑稽であ りにや、出来ません、此辞令は返します」(二)と言って、タテ また勤務初日の校長の訓示を真に受けて「到底あなたの仰やる通 ですから」(七)と、理屈にならぬ奇妙な理屈で威張る例もある。

向かって「え、瘠せても病気はしません。病気なんてものあ大嫌 な通常思いつかない発想の滑稽味がある。顔色の悪いうらなりに て置いた」(一)と、卒業出来ることに苦情を言おうとするよう

正義漢に似て非なる側面があるからだ。正義漢に見えるだけあっ 坊っちゃんは正義漢のパロディとなる。というのも坊っちゃんに このように滑稽な設定に基づくホトトギス的方法によって、 り、字義通り理解する滑稽味と言える

С

い。坊っちゃんの独特で滑稽な倫理観は次の引用Bの通りだ。 て確固たる倫理観を持つが、常識を転倒させたパロディに過ぎな もんか。いたづらと罰はつきもんだ。罰があるからいたづら 嘘を吐いて罰を逃げる位なら、始めからいたづらなんかやる

見潔い印象を与える。しかし坊っちゃんの倫理観は、 も心持ちよく出来る。(四 ルー ル

ずらを悪として否定するのではなく、小細工を嫌い正々堂々善 う性分に裏打ちされている。その性分から見れば引用Bは、 認められた将棋の「待駒」(一)を使った兄を「卑怯」(一)と思

シャツは処罰からの逃げ道を用意しているので「鉄拳制裁でなく のパロディとなり、正義漢と似て非なるものとなる。 つちや利かない」(九)と山嵐が言うので、うらなりの送別会の も悪でも行なうのがよいといった独特の信条を表わして一般道 さらに赤

うのも暴力の正当性やうらなりに役立つか考えず感情にまかせて のだからである。 行なうのは、いたずら同然で正義の「鉄拳制裁」と似て非なるも 後に「赤シヤツと野だを撲つてやらないかと面白半分に勧め (九)たことからも、正義漢に似て非なることは明らかだ。とい

不公平なのに受け入れざるを得ないことに対する坊っちゃんの

正し うなものだ。 ぢやないさうだ。一人だつて二人だつて正しい事なら通りさ い事が必ずしも通るわけではないという世間常識に反して正 回

次の引用Cは、校長と赤シャツが学校の宿直を免除されるの 山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るもの

通ると信念を貫くわけではない。この点でも正義漢に似て非なる ありますか」(十一)と言うのは本末転倒であり、 せず、辞表を「堀田には出せ、私には出さないで好、と云ふ法が はずの校長が山嵐を免職するのを、坊っちゃんは初めから撤回さ 例えば師範学校との乱闘事件での坊っちゃん達の無実を納得した の不平不満に忠実なだけで利他的行為に結びつくわけではない。 しい事は通るというタテマエを真に受けたように見えるが、 正しい事なら 自分

漱石とホトトギス派の写生文の抗争

ものと言える。

通じて『坊っちやん』の漱石文学での位置づけが出来るからだ。 チーフの処理の仕方の違いがあり、道義的モチーフの処理状態を 道義的モチーフ処理の観点から美文の 『猫』と比較して行なう。というのも漱石の美文・写生文にはモ 本節では 『坊っちやん』のホトトギス的方法採用の意味づけを、 『薤露行』と写生文の

内容上は明治の美文辞典に自然の風物の項目とともに忠孝・ 彩ったり対句などのリズム感によってモチーフを美化する。 先ず一般的に美文は、表現上は理想化された美しいイメージで また 信義

に関わる事柄を特に指す便宜的名称にすぎない。

夫婦関係などの人倫、

道義的モチーフには広範囲の内容が該当するはずだが、ここでは

実業家・金持ち批判、また正直などの徳目

の美文〉であり、 色ある『薤露行』

それは美文として自己矛盾となる。なぜなら人 は姦通という道義的モチーフを美化した〈姦通

作って迷亭に話している場面だ。

引用は、

挿む道徳的言説としての側面がある。

倒錯的姦通心理の表現に特

などの徳目の項目が並び、人事を扱う美文には教訓的コメントを

そこに『薤露行』の難解さがあった。 的に見えて、実は姦通の罪悪感のないギニヴィアとランスロット する。それに対して漱石の場合あえて姦通を美化して一見反道徳 容に批判的コメントを加える道徳的言説としてストレートに処理 事を扱う美文は道徳的言説の側面があるからだ。一般的に道義 を作者が処罰するひねりを加えて美文として処理しているのだ。 モチーフを美文として処理する場合は、姦通のような不道徳的

代わりに苦沙弥・迷亭が各自のエピソードを滑稽に語ることで、 裏に微笑を包む同情」がない点で漱石の写生文の語り手ではない ホトトギス的方法では滑稽なモチーフを 『猫』のネコは、作中人物を罵倒・揶揄し「気の毒の念に堪えぬ 〈写生〉する違いがある。

方漱石の写生文の方法は語りによってモチーフを滑稽化し、

る。 苦沙弥への嫌がらせの指示を金田自身が滑稽に語れるはずもない。 先方が大人しくしてさへ居れば(中略)気に障はる様な事もやめ 道義的モチーフをどのように扱っているかが、『猫』の焦点とな したがって他のモチーフを漱石的方法で処理する苦沙弥・迷亭が てやる。然し向が向なら此方も此方」(四)と意地を張るため、 くあしらう余裕もなく、苦沙弥が「怒るのは向が悪るいからで、

ここで苦沙弥・迷亭の順にその処理状態を確かめてみる。 苦沙弥が大きな鼻の鼻子をからかう「鼻の俳体詩」 次 を

苦沙弥の実業家批判とそれに反発した金田の嫌がらせ、そして妻

漱石的方法を用いた写生文となる。『猫』の道義的モチーフには

は夫に逆らう方がよいという迷亭の考えがある。金田は批判を軽

亭はすぐ出来る。(三 傍点は原文のまま) らん」(中略)「次へ穴二つ幽かなりと付けちやどうだ」と迷神酒供へといふのさ」「次の句は」「まだ夫ぎりしか出来て居 「第一句が此顔に鼻祭りと云ふのだ」「夫から」「次が此鼻に、

化す失礼な言動なのに人身攻撃の不快感よりも滑稽味が勝るのは、 し鼻を祀る祭に見立てることで滑稽となる。本来身体的特徴を茶 り上げず、単に「鼻」と一般化するだけでは滑稽ではない。 ればホトトギス的方法となる。からかい甲斐のある鼻の個性を取 鼻子の「猫脊の鼻」(三)自体滑稽であり、それを俳体詩に用 しか 13

い語り口に基づき、漱石的方法を示している。 鼻の個性を取り上げずにナンセンスな見立てでからかう邪気のな

このように鼻は茶化せたのに道義的モチーフでは打って変わる。

(g). 語り手の意向によってモチーフを処理するか否かを使い分けてい れなかったのだ。『趣味の遺伝』(明治39年1月)では、写生文の ない。というのも苦沙弥の真剣な想いであったからこそ滑稽に語 猶だ」(五) と苦沙弥は蔑視し、実業家批判を滑稽に語る余裕は 昔で云へば素町人だからな」(四)「教師は無論嫌だが、実業家は |僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さへ取れゝば何でもする、

事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。 は博士とか大学教授とかいふと非常に恐縮する男であるが、 切実さに基づかないという見方もあろう。だが「元来こ、の主人 れる状況にないので、漱石的方法による処理の有無はモチーフの 実業家よりも中学 妙な

か否かで漱石的方法による処理の有無が決まると言える。 る。このことからすれば、語り手にとって重要・切実なモチーフ

しかし金田の嫌がらせを受けて実業家批判を苦沙弥は滑稽に語

家批判を滑稽に語る余地があったわけではない コに暴露されている。したがって金田に嫌がらせされる前に実業 校の先生の方がえらいと信じて居る」(三 金田の嫌がらせを受ける前から実業家を蔑視していたのをネ 傍点は原文のまま)

のを示す対照例がある。次の引用は、苦沙弥が大和魂を茶化す文 漱石的方法に基づく処理を語り手にとっての切実さが左右する

章を朗読する場面だ。

有つて居る。詐欺師、 (中略)「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答へ 東郷大将が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和 山師、人殺しも大和魂を有つて居る

から常にふら~~して居る」(六) のが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。 て行き過ぎた。」(中略)「三角なものが大和魂か、 四角なも 魂である

大和魂は忠君愛国という徳目に関わるモチーフだ。

引用

の主旨は

和魂を持つ日本人の具体例に「東郷大将」に止まらず本来含める 味のないものであり、ホトトギス的方法に基づかない。しかし大 に滑稽味がないのに、 して居る」と表わすことで滑稽化している。このように素材自体 い。大和魂がわかりにくいのを字義通り魂のように「常にふら! べきでない「詐欺師」などを列挙して、卑俗化・茶化すだけでな 日本人すべてが持つ大和魂の定義はしにくいというそれ自体滑 列挙法や隠喩的言い回しのような表現の

にとってのモチーフの切実さに基づくことを示す。 迷亭も苦沙弥同様にモチーフに応じて処理出来るか否か対応が

は茶化せず、同じ道義的モチーフで対応が分かれるのは、 方で滑稽化するのが漱石的方法だ。大和魂を茶化せて実業家批

語り手

分れている。例えば「首懸の松」について次のように話している。

昔しからの言ひ伝へで誰でも此松の下へ来ると首が縊り度な

る。(中略) どうしても他の松では死ぬ気にならん。(中略)

うかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ないかし あ、好い枝振りだ。あの儘にして置くのは惜しいものだ。 سلح

が実に美的である。首がか、つてふわ~~する所を想像して (中略) 枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓る。 撓り按排

見ると嬉しくて堪らん。(二)

と自体は少しも滑稽ではなく、ホトトギス的方法に基づかない。 好い枝振り」に人間を下げた時の「撓り按排が実に美的」なこ

からないおどけた語り口によって不快どころか滑稽に感じさせる。 だが、死を茶化して不謹慎となるはずなのに、どこまで本気かわ るという見通しがある。その見通しは、正直などの徳目といった

に、夫婦関係といった人倫を迷亭は滑稽化していない。苦沙弥夫 漱石的方法で「首懸の松」の死のモチーフを滑稽化しているの

昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだつて

(の口論に迷亭は次のようにコメントしている)

難有くない。(中略)同じ女房を持つ位なら、たまには喧 云ふが、夫なら啞を女房にして居ると同じ事で僕などは一向 嘩

苦沙弥の妻を羨み、妻は夫に逆らう方がよいと人倫に反した主張 の一つ二つしなくつちや退屈で仕様がないからな。(六)

担いでいる。それによってこのコメントが茶化されるわけではな 品行の例として、迷亭は女児を売る話をしていつものように人を ているからだ。このコメントに続けて妻が夫に従順な頃の女の不 を茶化さずにするのは、 からかい甲斐のある妻を迷亭が欲しがっ

というのも如何に不品行かわからず、単に脱線したエピソー

ドに過ぎないからだ。 以上から道義的モチーフ処理の点で『薤露行』と『猫

は対

ないからだ。ここで道義的モチーフを滑稽化しないのは倫理的 要な実業家批判のモチーフを『猫』が写生文として処理出来て フを『薤露行』が美文として処理しているのに対して、同じく重 的となる。というのも漱石文学で重要な姦通という道義的モチー

らだ。『猫』で出来なかった実業家・金持ち批判の写生文とし 『坊っちやん』の正義漢のパロディだ。というのは次の通りだ の処理自体は、『二百十日』のホトトギス的方法で実行されてい 理は倫理的漱石像を補完するのか疑問が生じる。それを解く鍵 石像と合致するのか、あるいは道義的モチーフの美文としての処

漱石文学の重要な道義的モチーフが『坊っちやん』のホトトギス 的方法によって処理可能となった成果に基づくと考えられ、それ

ならない。 道義的モチーフを滑稽化してなお倫理的であるということにほか は漱石の倫理性を示すことになるからだ。即ち漱石の倫理性とは、

な倫理観を示す。しかし「罰があるからいたづらも心持ちよく出 トトギス的方法採用の意味づけを行なう。前節の引用Bは自らが 方法による処理をいくつか確認した上で、漱石文学にとっての 「卑怯」(四)でないのを威張り、坊っちゃんの性分に基づく切 さて坊っちゃんにとって切実な道義的モチーフのホトトギス的

気な悪いたづら」(四)とに区別することで、いたずらを禁止 来る」と罰を受けるか否かで気持ちよく出来るいたずらと「生意 る道義的メッセージが滑稽化・無力化されるだけでない。

引用

ける発想の滑稽味などのホトトギス的方法が、漱石文学で重要な いたずら出来るという本末転倒の発想やいたずらの善し悪しを分 セージも茶化されてしまう。このように罰があるから気持ちよく が含む「いたづらをしたつて潔白」 (四)であるべきというメッ

次の引用Dは吶喊事件で生徒を懲らしめられず、 坊っちゃんが

道義的モチーフを滑稽なモチーフへと変えている。

困っている場面だ。

D 旗 から泣寝入りにしたと思はれちや一生の名折だ。 宿直をして鼻垂れ小僧にからかはれて、 (本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。 争 略) 是でも元は 仕方がない

か分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つもの分らないのが困る丈だ。(中略)正直だから、どうしていゝ な百姓とは生れからして違ふんだ。(中略) どうしてい、か 下宿から弁当を取り寄せて勝つ迄こ、に居る。おれはかう決 があるか、考へて見ろ。 した勝てなければ、あさつて勝つ。 今夜中に勝てなければ、 あさつて勝てなければ、 あした勝つ。

傍点部の坊っちゃんの重視する正直は、国定修身教科書の格 「正直ハ一生ノ宝」(文部省『尋常小学修身書第二学年教師用 訔

心をした

回

傍線引用者、

以下同じ

屋の前に弁当を取り寄せて生徒が謝罪するまで居座るという、 傍線部の尻取り文で執念深さを示し、波線部の生徒の籠城する部 強がる性分と結びつき独特なものになっている。即ちその信念は 坊っちゃんの信念は、生徒を懲らしめられず血統まで持ち出して 治37年)で肯定される徳目だ。だが、正直は不正に勝つという そ 明

れ自体滑稽で子供じみた根競べの形を取る。

子供じみた根競べの

三点ある。

先ず

猫

で処理出来なかった重要な道義的モチー

フ

さて『坊っちやん』

道義的メッセージに似て非なる滑稽なものになってい ナンセンスな理屈などのホトトギス的方法によってこの信念は 滑稽な設定や、「正直だから、 どうしていゝか分らない」という

ちゃんに赤シャツが答えようとしない場 理 ところで坊っちゃんにとって切実な道義的モチーフなのに未処 の例がある。 次の引用Eは、 前任者を陥れた者の名前 ※面だ。 を坊

Е より気の付け様はありません。わるい事をしなけりや好 略)どうか気を付けてくれ玉へ」「気をつけろつたつて、 でせう」赤シヤツはホ、、、と笑つた。(五 ["]だれと指すと、其人の名誉に関係するから云へない。

処理していないのに波線部で赤シャツが嘲笑するのは、 明治37年)と重なり、それ自体滑稽ではない。特に写生文として 傍線部の坊っちゃんの主張は、 ナカレ」(茨城県師範学校附属小学校編『国定教科書教授細 「善ハ小ナリトモナサザルコトナカレ、悪ハ小ナリトモナスコト 国定修身教科書の悪を戒める格 単純すぎ

る主張だからだ。坊っちゃんが作中人物に笑われるのは、

奇妙な

ちやん』のホトトギス的方法運用の一貫性の欠如ではなく、 外にない。 張り方が校長に笑われている。道義的モチーフの嘲笑は引用E以 をしていると言える。 ろ坊っちゃんの信条を嘲笑する存在に赤シャツを位置づける働き したがって引用Eの道義的モチーフの 未処理は

例えば前節の引用Aで腫れて変な顔と坊っちゃんの奇妙な意地 理屈や滑稽な素材のホトトギス的方法による場合がほとんどだ。 のホトトギス的方法の意味づけは (Î) (3)

わし、坊っちゃんの倫理観も性分に根差して切実ゆえ滑稽に語れ 語り手にとって切実なモチーフを処理出来ないことを『猫』 を示すことになる。漱石的方法が語り口によって滑稽化する以上 をホトトギス的方法で処理出来たことから、 ①漱石的方法の限 は表

モチーフを処理出来た、 ない。それならば 『琴のそら音』で道義的モチーフ以外の切実な 作者の相対化によって滑稽味を生じる方

法を用いないのはなぜか。切実な道義的モチーフは作者の相対化

漢のパロディとなるのは必然であった。 自らの方法の限界によって重要モチーフの処理にホトトギス的

処理にはホトトギス的方法以外なく、その点で坊っちゃんが正義 するのは設定上無理がある。したがって重要な道義的モチーフの

ならば、現代の小説(中略)等、

一として満足すべきものは

義漢が自らの倫理観を真面目に語る程、

作者が相対化して滑稽に

でも処理出来ないからだ。例えば山嵐のような比較的常識的な正

ギス派は道義的モチーフ処理にホトトギス的方法を用いていない 法を用いること自体新しい試みであることだ。というのもホトト けが二点出来る。それは②道義的モチーフ処理にホトトギス的方 方法を用いるのは漱石の敗北に見えるが、 むしろプラスの意味づ

摘する。この指摘は、

ホトトギス派の写生文の重要概念の

「作者の心的状態」で写生文を規定す

趣味〉を用いずに代わりに

理にホトトギス的方法を用いたのは新しい試みとなる。 ていない。 実業家批判・夫婦関係のような人倫・徳目に関する事柄を処理し 分の一に満たず、それらすべてホトトギス的方法を用い 太・寒川鼠骨・河東碧梧桐の作品) 38年の雑誌『ホトトギス』掲載の一般投稿と高浜虚子・坂本四方 からだ。管見に入ったホトトギス派の写生文約九○編 したがって漱石が 『坊っちやん』で道義的モチーフ処 のうち滑稽味のある作品は三 (明治32~ ホトトギ ているが

> のモチーフや重要な道義的モチーフ処理に用いられていな 義がある。 ホトトギス的方法は 『猫』にも用いられてい いるが、 死

もう一つのプラスの意味づけは、

③ 【文章 一

口

明

噺 しい。其為め写生文としての価値も少ない」(虚子 では「俳句を作つた事のない人の写生文はどうしても俳趣味が乏 石の写生文理論上の『坊っちやん』の位置を示す。ホトトギス派 月)にまとめられる理論の普遍性が確認されることだ。 ٨ 11月)で批判することになるホトトギス派の方法を『坊っち 明治39年10月 全集12巻一七〇頁)、「俳句の標準を以て見 の重要モチーフ処理に用いたことで、『写生文』 (明治 俳 諧 40年

も要点だと考へるにも関らず誰も説き及んだ事のない」(『写牛 文』全集16巻四八~四九頁)ものとして「作者の心的状態」を指 通の文章との差違を算へ来ると色々ある。色々あるうちで余の尤 を絶対的価値あるものとする。それに対して漱石は い」(四方太『文章談』明治39年7月9巻10号)と、 「写生文と普 〈俳句趣

れが独善性批判を可能とする トギス派の写生文にも当てはまる普遍性を持つことを意味し、 判となるだけでない。「作者の心的状態 ることで、〈俳句趣味〉を絶対化するホトトギス派の独善性の批 が漱 石のみならずホト

たが、 は方法を異にする以上具体的表われ方は異なる。語りを方法とす 「作者の心的状態」を前節で対象に その 〈距離〉 は共通点であっても、 〈距離〉 漱石とホトトギス派で を取ることと捉

ス的方法の滑稽化する対象を拡大し写生文を豊かにしたことに意

そ滑稽に語れ、 る漱石の場合、 その点で 物語内容に対して語り手が 〈距離〉には滑稽化の機能がある。 〈距離〉を取るからこ ホト

捉え直したものと言える。四方太は「俳句趣味といふよりも トギス派の場合「作者の心的状態」 人情といつた方が俳句を知らぬ人には却てよく解るかと思ふ。」 は、〈俳句趣味〉 の一側 面 非 を

よし人間でも、宛も自然物の如く表面上の美のみに目を着ける」 号)としている。虚子も「俳句の詠ずる美はもと自然的であつて、 を非人情といふやうに解する」(『文話三則』明治39年12月10巻3 「何処までも天然を本として行つて、人情の奥まで深入りせぬ の

としている。つまり〈俳句趣味〉には人事を扱っても人情に深入 (『写生文の由来とその意義』明治40年3月 全集12巻一八四頁)

りせぬ

動・出来事を対象として選ぶことが出来、素材自体の滑稽味を ギス的方法では、表面的で深入りせぬ態度ゆえに滑稽な人間の言 生対象と一人称の写生主体との〈距離〉として表われる。 ホトト

〈写生〉することになる

トギス派は〈写生〉を方法とするゆえ、「作者の心的状態」は写

〈距離〉を取る態度としての側面がある。

したがってホト

ずに写生文を規定すること自体充分批判たり得る。 しかしホトトギス派の絶対化する〈俳句趣味〉という言葉を用い すぎず、ホトトギス派の独善性批判にならぬという見方もあろう。 ここで「作者の心的状態」 が 〈俳句趣味〉 の単なる言い換えに また〈俳句趣

年9月) :石とホトトギス派に当てはまる普遍性は、 の次のコメントが「作者の心的状態」 を示唆し、 **『文学談』** (明治 39 ホトト

捉え直しなのは当然とも言える

の否定ではないので、「作者の心的状態」が

〈俳句趣味〉

の

ギス的方法に基づく 摘出来、 〈距離〉が共通点となることで確認される 『坊っちやん』にその「作者の心的 状態」

指

じて合点しさへすれば、それで作者の人世観が読者に徹した と云ふてよい。(中略)現実世界に在つて鼻の先であしら の様な複雑な社会には円満に生存しにくい人だなと読者が感 価 坊ちやんといふ人物は或点までは愛すべく、 て居る様な坊つちやんにも中々尊むべき美質があるではない 値のある人物であるが、 君等の着眼点はあまりに偏頗ではないか、と注意して読 単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今 同情を表すべ

0) の観点からすれば傍線部のように同情しつつ欠点を認める対象と 漱石のコメントは坊っちゃんの美質の指摘よりも、(1) 〈距離〉 る。(全集25巻一八○頁 の取り方の指摘と捉えられる。坊っちゃんの むしろ写生

— 10

者が成程と同意する様にかきこなしてあるならば、

作者は現

今普通人の有してゐる人生観を少しでも影響し得たものであ

を獲得する。 ことを示す。 読み取る。このように長所・短所を示すように作者の選んだ人 つも同情する「作者の心的状態」に等しく、漱石の理論は普遍性 柄 ・倫理観の設定は、作者が坊っちゃんに〈距離〉 しかし 同情しつつ欠点を認めるやり方は 『坊っちやん』の独特さも明らかだ。 を取っている

稽な倫理観で正当化する欠点のあることを、その設定から読者は

「肝癪が強過ぎて」(七) 喧嘩するのを奇妙な理

屈や滑

くな」(一)く「竹を割つた様な気性」(七)はうまくいけば長所

になるが、

対化する点で『琴のそら音』のような漱石の写生文の方法に基づ 性は確認出来る。ところで作者が一人称の語り手坊っちゃんを相 滑稽な設定の選択をしている。 は坊っちゃんに〈距離〉を取って長所・短所を読者に感じさせる に見える。しかしホトトギス的方法での なる。このように純然たるホトトギス派の写生文となってい 化して写生対象に いからだ。 『坊っちやん』を通じて漱石の理論の普遍性を確認するのは矛盾 『坊っちやん』はホトトギス的方法と合致し、漱石の には、 即ちホトトギス派では作者は一人称の写生主体と一 滑稽な設定の選択を可能とする働きがある。 〈距離〉 を取るが、『坊っちやん』はそれと異 したがって〈距離〉 「作者の心的状 の機能の点で が理論 二の普遍 態 作者

の

ることは、写生主体となるべきはずの坊っちゃんの叙述態度がホ 文とも異なる独特な構造になっている。 |坊っちやん|| がホトトギス派の写生文と異なる独特なものとな 滑稽味を生むメカニズムとしてホトトギス的方法を用いても

従来の漱石の写生文の方法の枠に収まらず、

ホトトギス派の写生

目に語っている点で漱石的方法と異なる。結局『坊っちやん』は くようにも見える。だが、坊っちゃんが滑稽な倫理観などを真面

員会議での校長の発言場面だ。 なっていない。 坊っちゃんは他人の言動に批判的コメントをつけ、 報告する態度で一貫している。これを 派の写生文は、他人や自分の言動が滑稽なものであっても淡々と トトギス派と異なる点でも言える。前節で見たようにホトトギス 例えば次の引用Fはバッタ事件の処分を決める職 〈写生〉と呼ぶならば、 (写生) に

狸は例の通り勿体ぶつて、

教育の生霊と云ふ見えでこんな意

だ、おれの尻だと吹れ散らかす奴が、どこの国にあるもんか、治れば夫で沢山だ。人の尻を自分で脊負い込んで、おれの尻だ。(中略)もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退 分の咎だとか、不徳だとか云ふ位なら、 動まるとひそかに慚愧の念に堪へんが、不幸にして今回も 味 やめにして、自分から先へ免職になつたら、よさ、うなもん ればならん。(中略)」かう校長が何もかも責任を受けて、 かゝる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなけ んな自分の寡徳の致す所で、 (中略)彼はこんな条理に適はない議論を吐いて、 同を見廻した。(六) の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるの (中略)自分はよく是で校長 生徒を処分するの 得意気 は、

る。 発言を紹介し、校長のタテマエの発言を字義通り受取って傍点部 部のように批判的に発言振りを描写しているのは〈写生〉と異 のように坊っちゃん独特の滑稽な喩えの形で理解した上で、

『三百十日』の処理を確かめなければならないが、それには ることでも、『坊っちやん』の成果の意義は増すはずだ。むろん 試みを経て『二百十日』のホトトギス的方法で実行出来たと考え 文から脱皮したか考える必要もあり、 分』・『虞美人草』が道義的モチーフを如何に処理し、 『猫』で出来なかった実業家批判の処理自体は『坊っちやん』の 以上から『坊っちやん』 の試みと成果が明らかとなっ 今後の課題としたい。 写生文・

傍線部の馬鹿にしたような滑稽な比喩で始めから枠付けて校長

- 1 丸谷才一『闊歩する漱石』講談社 平成12年 一〇頁
- 2 語国文学』20号 平成10年 拙稿「『文学論』から作品へ―漱石〈写生文〉論」(『弘前大学国
- 3 大阪芸術大学 拙稿「漱石『琴のそら音』論―インフルエンザの近代文学史 『河南論集』 6号 平成13年
- 読者は、坊っちゃん・山嵐らと距離を取って笑い、写生文的態度 好川佐苗氏はアレゴリカルな人物造型によって感情移入出来ぬ
- 漱石の考える写生文の「作者の心的状態」の表現方法として物語 ゴリー的世界」『梅光学院大学論集』 40号 平成19年)しているが になっていると指摘(「『坊っちやん』における〈名〉―そのアレ 言説・物語内容の点から捉える本稿と立場を異にする。
- 定の滑稽味が主となっている。 る」(「『坊っちやん』の構造―悲劇の方法について」 『国語と国文 男はまじめにおかしな話をするので、いっそう愉快さは増幅され 次から次へと飛び出し、読者を一種痛快な笑いの世界へと誘う。 有光隆司氏は「『バッタ事件』と、じつに愉快で滑稽な小事件が 一昭和57年8月号)と指摘しているが、語り口よりも事件・設
- まう」(「『坊つちやん』の〈語り〉の構造―裏表のある言葉」 『日 もらしく真面目に語る語り手の姿に、思わず〈笑い〉が洩れてし 小森陽一氏は「語り手が示す理由は、 まったく理由などにはならぬしろものであり、それをもっと 〈常識ある他者〉にとって
- 7 拙稿「姦通の美文―漱石『薤露行』とテニスン、マロリー」(神 **『国文論叢』** 38 号 平成19年

本文学』昭和59年3・4月号)と指摘している。

8 芸術大学『河南論集』 5号 拙稿 「『吾輩は猫である』論―『文学論』から写生文へ」(大阪 平成11年

- 9 と修正すべきだ。そうすることでより単純化した図式となる。 フの未処理を見落としており、『趣味の遺伝』同様使い分けている 術大学『河南論集』7号 平成14年)で『猫』はモチーフによっ て写生文的処理を使い分けないと指摘していたが、道義的モチー 拙稿「変奏する写生文の構造―漱石 『趣味の遺伝』論」(大阪芸
- 10 ちやん』と『坑夫』のつながりを指摘(「『坊っちやん』論―写生 文、あるいは一人称回想への眼差し」広島大学『国文学攷』 167号 山下航正氏は漱石の写生文を主観・客観の観点から捉え、『坊っ
- 11 注6の小森氏は坊っちゃんが美質を失っていると指摘する。 平成12年)している。
- (付記) 体に改め、ルビは削除した。引用の修身書は国立国会図書館近代 デジタルライブラリーに拠る。 本高浜虚子全集』(毎日新聞社 尚、 · テキストは『漱石全集』(岩波書店 昭和49年)を使用。 平成5~11年)、 旧漢字は新字
- (ふくいしんじ/大阪芸術大学非常勤講師